

「活動の概要と研究成果」

NO.J2411

活動題目: 16～17世紀対馬の外交僧による朝鮮通交システムの連続と変容

所属: 九州大学人文科学研究院

氏名: 顧明源

近年、「柳川一件」や以酌庵輪番制の再検討により、中近世移行期における日朝関係の実態の再検討も迫られている。本研究では、こうした研究動向を意識し、日朝関係の最前線に立っていた対馬に注目し、その朝鮮通交を下支えしていた外交僧とその拠点を「外交僧による朝鮮通交システム」と称し、その連続性と非連続性を解明しつつ、中近世移行期の日朝関係の変遷をあとづける。

対朝鮮通交の実務を担当する外交僧については、近年の研究進展により、周知の以酌庵輪番制のみならず、対馬藩の外交僧系統の存在も判明している。しかし、対馬藩の外交僧系統の創出について、未解明のままである。

対馬西山寺に伝来した文書群や対馬宗家文書の分析を通して、「柳川一件」後、対馬藩が積極的に規伯の弟子筋を起用し、以酌庵輪番制と並行する藩の外交僧体制を創出した経緯を明らかにした。外交僧体制については、つぎのように整理できる。

・公儀を代表する外交僧系統: (幕府の寺社奉行—金地院—) 五山碩学—以酌庵輪番僧

・対馬藩の外交僧系統: (藩の寺社奉行—) 西山寺—清書役僧・東向寺僧

この二つの外交僧体制は、相互補完的に「柳川一件」前の景轍・規伯の担った役割を果たしていた。「柳川一件」後、対馬藩の朝鮮外交体制の再構築は、ある意味で中世以来の外交僧による朝鮮通交の伝統の延長線上に置かれると考えられる。ここで、一六世紀から一七世紀にかけて臨濟宗幻住派僧が長らく対馬の外交僧として活躍していたことを強調しておきたい。日朝外交を下支える実務者の面からは、中世後期から近世初期にかけて一種の連続性が窺える。

また、以酌庵輪番制について、これまでの研究は、以酌庵輪番僧に集中し、制度そのものを十分に検討していないことを指摘したい。この一年間、東京大学史料編纂所所蔵「森潤三郎氏旧蔵史料」や「金地院記録」などの調査をしたことで、以酌庵輪番制のなかで、金地院僧録の存在は見落としてはいけないことを意識した。今後、これらの史料を分析し、以酌庵輪番制を制度的に検討しておきたい。